

全体性・時間・空間

林 隆 也

朝日大学 法学部

Die Ganzheit - Zeit - Raum

The Whole - Time - Space

Takaya HAYASHI

School of Law, Asahi University

Zusammenfassung

Dieser Artikel besagt, dass das Seiende einzigartig und ganzheitlich ist. Die Identität des Seienden bedeutet die Ähnlichkeit des Seienden, die sich nicht wiederholen kann. Ein Phänomen ereignet sich nur einmal und es gibt keine Wiederholung. Deshalb sehen wir nur Teile des wirklichen Seienden, wenn wir mit Zahlen die Welt erkennen wollen. Ein Gleichheitszeichen besteht nur in den menschlichen Begriffen, die phantastisch sind. Die Zahlen schneiden die Wirklichkeit des Seienden ab, und zeigen uns Teilen der Wirklichkeit. Die Objektivität der Naturwissenschaft bedeutet diese Teilen der Wirklichkeit, die uns die höchste Sicherheit der Wissenschaft geben können. Aber die Objektivität der Naturwissenschaft ist nicht anders als die Subjektivität des Urteils der Kunst. Die beiden sind grundlos und haben keine Sicherheit. Begriffen, zum Beispiel a priori, a posteriori, Ding an sich, usw, sind alle menschliche Sache und keine Beziehungen mit den wirklichen Seienden. In der wirklichen Welt gibt es keine Naturgesetze. Zeit und Raum sind nach den Aspekten der Einzigartigkeit und der Ganzheit nicht teilbar und nur vollständig verstehbar. Zeit fließt nicht. Raum hat keinen Zwischenraum. Deshalb haben wir jetzt leider keine Möglichkeit, Zeit und Raum zu verstehen. Trotzdem könnten wir von diesem Punkt an eine neue Dimension des Denkens erreichen.

1 唯一性と全体性念

1.1 神話

神話は、世界各地で作られ、これまでの人間の考え方に様々な面において大きな影響を与え、また、ニーチェやフロイトに見られるように、文化的にも豊かな世界を提供してきた(1)。アリストテレスに依れば、タレス (etwa 625-545 v. Chr.) から哲学 (自然哲学) が始まるのであるが(2)、神話と哲学 (学問) は、異なるものであると考えられている。つまり、タレスは、アルケー (ἀρχή 始まり) を水 (ἕδωρ) と考え、合理的な説明をした、ということである。神話では、神が世界を創造し、その空想性を楽しむしかないが、哲学は、そうではない。現代の我々は、そのように理解して来た。Φιλοσοφία、philosophiaは、φιλία、philiaとσοφία、sophiaであり、知の愛、知への愛 Weisheitsliebe, Liebe zur Weisheit(3)である。哲学の講義では、先ず始めに、このことが解説されるであろう。そして、現代哲学に至る果てしない議論が続くのである。

しかし、神話と哲学が、それ程、峻別可能であるのか、我々が考えてきたことは、本当に、合理的であるのか、という疑問は、少し考えてみれば、すぐさま思い付くことでもある。タレスが日食を予言した (紀元前585年5月22日) というのも(4)、大抵の逸話が後世の作り話である可能性が高いことを考えれば、本当かどうか、我々には確信は持てないし、タレスが、先行の誰かの話から水を選んだに過ぎない、という疑問も、ない訳ではない。プラトンを介してのソクラテスに関する情報もまた、何処まで確実であるかは、誰にも分らない。にもかかわらず、ソクラテスは、2000年以上に渡り、我々に哲学すること (Philosophieren) の魅力を伝えていることも確かであろう。資料の少なさ、不確かさは仕方がないとして、神話と哲学は、実際のところ、どのように質的に異なるのか、アリストテレス以来の知識の確実性は何処にあるのか、このような素朴な疑問が明快に解き明かされないままであることも否定出来ない。アリストテレスの『形而上学』が、単に、τὰ μετὰ τὰ φυσικά (自然の後) であったことを考えれば、この不明さも当然であるとも言えよう。

1.2 同一性

存在するもの (das Seiende) について、唯一であること (die Einzigartigkeit) を、その特徴として我々は考えて来た。これは、地球上に存在するもの、宇宙に存在するもの、総てに妥当する。非常に似ているもの、極めて類似のもの (die Ähnlichen) はあるが、同一のもの (das Gleiche) は、それ自体以外には、存在しない。再確認しておく、それ故、 $A=A$ は、成立しない(5)。如何なる視点からこの等号を理解しようが、存在するもの A は、 A として、その時点でのみ存在し、我々が A と捉えた時には、既に A ではない。今日の地球は昨日の地球で

はない。同様に、現在、我々が立っているこの地球は、つい先ほどの地球ではない(6)。当然ながら、 $A=B$ もまた、成立しない。同一の存在するものはあり得ず、また等号自体も人間の概念でしかない(7)。

このように考えると、ではアリストテレス以来の論理学はどうなるのか、という問題が、当然ながら生じる。 $A=A$ も $A=B$ も成立しない、などという滑稽なことは、大抵の人であれば、認めることもないであろう。しかし、残念ながら、アリストテレスから、カント、或いは、現代の論理学を参考にしながらも(8)、実際のところ、 $A=A$ という等式が成立する現実、というものは、何処にも存在しない。現実の存在するものと、抽象化された論理式は必ずしも対応する必要はない、という反論があるとすると、そのような論理式、論理学はもちろん、どれ程、積み重ねてもらっても結構で、それは、プラトンのアイデアと同様に、単なる空想であり、もともと現実とは関係し得ない概念に過ぎない、というだけのことである。概念は概念である、ということ、同語反復として、 $A=A$ ではないか、ということこそ、従来の考え方なのである。これを我々は、始めから、幾度となく指摘している(9)。

再確認すると、例えば、この地球は、宇宙の中で、唯一の星として存在する。これと全く同様に、足元に転がっている一つの小さな石もまた、宇宙の中で、唯一の石として存在する。我々人間は、それぞれが、たった一人の人間として、この地球上に存在する。これと全く同様に、足元を歩き回る一匹のアリは、たった一匹のアリとして、この地球上に存在する。地球も石も人間もアリも、総て、同様の存在するものとして、宇宙の中に、地球の上に、存在する。宇宙の中でただ一人の人間と、宇宙の中でただ一匹のアリと、全く同様の存在するものであり、それだけのことである。アリも、小石も、人間も、地球も、更には宇宙全体も、全く同様の存在するものとして、我々は捉えることが可能である。そのどれもが、唯一の存在として、他の如何なるものとも代替不可能である。

逆に言えば、これまで、何故、植物や動物や人間を、他の存在するものと区別し、特別な枠に当てはめる必要があったのか、ということでもある。特に、人間は、特別扱いである。ユダヤ教、キリスト教の考え方には、その傾向が強い、ということは、旧約聖書の創世記を読めば、容易に確認出来る。この傾向が、実存主義や言語哲学等、現代に至る思想や、更に環境問題にまで、かなり深く影響していることもまた、十分、考えられることである。しかし、地球上に生きる人間も、宇宙の何処かにいるかも知れない宇宙人も、この宇宙での存在としては、何の区別もない「宇宙人」であり、地球の表面に転がる小石も、遙かかなたの巨大な恒星も、宇宙での存在として、何らの区別はない(10)。

このような視点に立つと、従来の人間を特別扱いにする考え方や、人間を超えた何らかのものを想定する総ての考え方が、如何に空想的で、対立自体が空想上のものであるか、ということが明白になるのである。このことが明確になることで、従来からの曖昧な議論から、我々は

容易に解放される可能性がある。それだけでも、古代ギリシャから現代に至る思想の積み重ねに加え、従来の膨大な哲学史、研究書において、そこで語られていることは、結局、何であったのか、と自問自答し続けて来た我々の混迷も、少しは解消されるかも知れないのである。例えば、西洋的、東洋的、という見方自体が、ほとんど意味がないということは明らかであろう。このような「常識」が、我々の目の前には山のように堆積している。

当然ながら、繰り返すが、我々のこの考察を含め、従来の総ての哲学的な思想もまた、空想上のものでしかなく、如何なる対立も、それぞれ、その根拠は何処にもあり得ない。カントの時代であれば、イギリスの経験論と大陸の合理論、現代であれば、超越論的哲学と分析哲学、言語哲学等々、主義（-ismen）や学派（Schulen）は、自己の立場を主張することに熱心である。しかし、どの場合も、結局は無根拠である。それに気付かず、あれこれ論じる愚かさを、我々は、始めから回避するために、再確認をしているに過ぎない。或いは、様々な極限的な場面を想定し、人間がどのように考え、行動するか、という例題もまた、現実とはかけ離れた遊びの思考実験に過ぎない、と言えよう。現実の人間が生きる場面は、ルールが決められたゲームのように進行しない。人間が判断する前に物事は進行し、判断した時には既に状況は変化している。そして、同一の物事は生じない。思考実験は、あくまでも想定であり、想定は、現実ではない。想定に依って現実の人間を追い詰めるのは、単に貴族的な有閑的競技でしかなく、生きることに必死である人間には全く関わりのないことである。現実は、ゲームではないからである。

明白なことに、全宇宙の存在するもの、起きているように見える現象にも、あらかじめのルールというものは存在しない⁽¹¹⁾。その上で、現実の人間と存在するものを対象としながらも、哲学もまた、自己を含め、結局はどれもが作り話であることを考えれば、もちろん同様に無意味であるが、その無意味さを理解した上で、次に何を語るのかが、問題なのである。

例えば、天使について考えてみると、神の使いとしての天使（der Engel, un ange, angel, ἄγγελος; ángelos, מלאך; mal'akh, ملائكة; malā'ika, ملائكة; malā'ik, Ангел）は、様々に変化しながら、現代にまで、伝えられている⁽¹²⁾。恋を成就させるキューピッドともなると、その語源やら起源やらの詮索自体が無味乾燥としたものとなり、せつかくのキューピッドのイメージを壊しかねない。天使はキューピッドであっても何の問題もなく、アンゲロスである必要はない。にもかかわらず、伝令であるとか、クピーダーであるとか、詳細な解説が始まる。しかし、この解説は、聖書やクルアーン（コーラン）から作られており、日本で作られた怪獣の解説と、質的には全く同様である。天使も怪獣も同じである、という説明は、なかなか見られないであろうが、実は、そうなのである。キューピッドが、クピーダーであり、アンゲロスである、という解説自体が、天使自体を作り上げている。そのことを、確認しながら、恐らくは、キューピッドを見るのではないか。何故なら、キューピッドがいないと恋が成就しない、と

「信じる」若者達にとって、キューピッドの存在は必須だからである。このように、人間は、生きるために様々なものを作り出し、それを支えに生き抜いてきたとも言えるのである。それ故、天使について語ることも、人間について語ることも、その無根拠性 (Grundlosigkeit) を確認しながら、進められるべきものなのである。そして、悪魔も天使も一緒、という夢のない話が始まる。これが人間が考えることである。この前提を改めて確認するために、我々の考察もまた、堂々巡りをしているのである。

1.3 数の概念

それ故、「数える」(zahlen) ということは現実の存在するものからすれば、全く不可能であり、単なる類似品を並べて、「数える」という人間的な行為が初めて開始されるのである。数は、概念である(13)。2 個目の地球は存在しないからである。リンゴを 1 個、2 個、3 個と数えるためには、それぞれがリンゴである、という認識が必要である。カナダ=エスキモーには、そのような認識がなく、獲ったアザラシを数えることをしなかった。獲ったアザラシは、それ以前に獲ったアザラシとは、既に異なるものであった。数という概念も、宇宙に自然に転がっているような「普遍的な」ものではない、ということが、ここから明白になる。数の概念の客観性を信じている人達には申し訳ないが、そのような「客観性」は、実は、何処にもないのである。あるのは、人間が作り出した数という概念だけである。

高校の数学で学ぶ数学的帰納法についても、あの証明方法を使って、問題を解きながらも、何処か、ぼんやりとした不確実を感じる生徒は、少なくはないであろう(14)。 $n=k$ と $n=k+1$ との間の保証はどうなるのか、というぼんやり度である。結局、 $1+1=2$ が公理的にしか理解出来ないとする、数の確実性も、実は、その「程度」であるということである。

当然のことながら、数に依る「客観性」と、「主観性」という概念もまた、極めて人間的なものであることは明らかである。唯一的に存在するものからすれば、客観的も主観的も、全く同じことであり、客観的と考えられる科学的客観性も、主観的と考えられる芸術的判断も、全く同類の人間的な概念でしかないのである(15)。

自然科学の客観性には基準があるのではないか、という指摘については、基準自体が恣意的である、と答えることが出来る。如何なる基準も人間が恣意的に作り出したものであり、人間は、その基準と対象を比較し、客観性を語っているに過ぎない(16)。

人間が数を数える、という行為に言語が必要であるかどうか、これも不明であり、言語の概念もなく、小石を並べて、その「光景」を区別したということも、十分、考えられる。言語がなくとも、唸っていれば良い。概念が作られる以前に、概念に該当する内容が、人間の頭の中に作られていた、と推測は可能である。つまり、感情も概念も、人間の恐らくは「考える力」

(Denkenskraft) (17) に依って形成され、それを表現するために、その後、言語の形成が生じ

る。言語に依って、人間の考える行為が制限されるのではなく、その逆である。このことは、言語が生じる以前の人間だけに妥当するのではなく、現在の我々自身にも妥当する。言語は、人間の考える能力の総てではない(18)。言語を使用しない考える力が先にあり、言語にもならない概念的なものや感情的なものを形成し、その概念的なものが言語的なものに依って表現される。それ故、「言葉にならない気持ち」がある。人間以外の動物が、「考える」かどうか不明であるが、考えているとしても、それを表出する「言語」がない。このように考える方が、自然ではないかと思われるが、実際の経過は、誰にも分からない。

1.4 全体性

前置きが長くなったが、次に、存在するものの根本的な性格として、全体性 (die Ganzheit) を考察する。

唯一なものとして存在するものは、総て、全体的なもの (das Ganze) として存在する(19)。部分は存在しない。何故なら、総ての存在するものが、その都度の唯一なものとして存在し、時間的経過とは関わりなく、それ自体のみで完結した存在であるからである(20)。生物的なものと言えば、ウイルス、バクテリア、単細胞生物から、多細胞生物まで、総て、全体としてのみ存在し、部分で生きる生物はいない。物質的なものもまた、小石から、地球、太陽、宇宙全体まで、総て、全体としてのみ存在し、部分的な恒星も、部分的な宇宙も存在しない。部分的な液体、気体もあり得ないことは、言うまでもないであろう。宇宙には、部分として存在するものはなく、単に、人間が部分的なものを作り出しているに過ぎない(21)。一つの太陽は、唯一で全体的なものとしてのみ存在し、部分的な、かけらのような太陽は存在しない。それは、全宇宙に妥当する。隕石が二つに割れて、二つの隕石が地球上に落下したとすると、その二つの隕石は、それぞれが全体的なかけらの隕石であり、元の隕石の部分ではない。人間が、その隕石を観察しながら、二つの隕石は、元は、一つの隕石であった、と見え、元の隕石の一部であった、と理解するに過ぎない。

存在するものは、唯一であり、全体的である。これを、我々は、無根拠的に理解する。唯一性と全体性が、存在するものの根本的な性格として、現在のところ、我々が見い出している最も重要な観点である。しかも、このことは、全く新規でもなく、特別なことでもない。ただ単に、現実の存在するもの、現象しているものの性格を、なるべく歪めず、眺めた結果に過ぎず、恐らくは誰かが語っており、誰もが気が付いていたような事柄なのである。それにもかかわらず、相変わらずの論争が続いている、ということは、やはり、根本的には理解されてはいないのではないか、と思われる。実に当たり前のことであるにもかかわらず、この現実を認めることが出来ない人々が、「常識」を形成する。我々は、その常識が、現実とは、ずれていることを述べているに過ぎない。それ故、新奇なものは、何処にもあり得ないのである。

1.5 部分

そこで登場するのが、部分である。全体的なものを、分解することで、人間は、その対象を詳しく「調べる」ことが出来た。これが学問の始まりである。しかし、その部分は、大雑把な誤差の塊であり、全体を見失い、迷路へ迷い込むのである。

アリストテレス以来²²⁾、知識というものは、部分を子細に捉え、部分と全体との関係を考えながら発展してきた。部分的なものに分解し、更に細かく観察することこそ、「学問」或いは「科学」の進歩であった²³⁾。そして、神話のように想像と創作ではなく、現実の事実に従い、数値化し、対象を理解することが、「客観性」を保証したはずである。人間は数を発明し、数え、計量したのである。しかし、数を用いた客観性は、どの場合でも、恣意的な基準を基にした比較の意味でしかない。或る基準と同じであるか、それよりも大きいか、それよりも小さいかを述べているだけなのである。数の概念に「絶対的」な意味はなく、それを用いた客観性にもまた、「絶対的」な確実性もない。あるのは、比較だけである。

古代ギリシャでは、恐らく、地面に太い木の棒で描いた直角三角形を用いて、ピュタゴラスの定理を証明したであろうし、円を用いて、ターレスの定理を証明したであろう。彼らが見ていたものは、アイデアの直角三角形であり、完全な円であるが、そのようなものは、現実には存在しない。にもかかわらず、測量を用いて、土地の面積を図り、税を取り立てる計量も、実際に役立つはずである²⁴⁾。現実の測量も計量も、非常に大雑把であろうし、どれ程、正確であるのか、疑問があるとしても、現実には、その時代の誤差の感覚の範囲内で、十分、「正確」であり、十分な機能を果たしたはずである。そして、大雑把な誤差の範囲内で、「客観性」は、確保されて来たのである。つまり、客観性は、様々な方法で決められてきたのであり、人間の概念を超えたものとしての絶対的な「客観性」がある訳ではない。地球の外に、数の概念がないことと同様に、客観性の概念もないのである。

生物学で考えると、昆虫を分解し、動物の死体を解剖し、次に人間の死体を解剖し、各部を分解し、骨と筋肉を分け、内臓を取り出し、眼球を調べ、血液循環を発見し、細胞を発見し、遺伝子に行き着く。しかし、骨だけで生きている動物は存在せず、遺伝子だけで生きている生物も存在しない²⁵⁾。単細胞生物の場合、その名の通り、1個の細胞で生きているが、多細胞生物の場合は、そこから取り出した細胞1個だけでは、「生きて」行けない。多細胞生物から取り出した細胞1個は、その時点で「死んで」しまう。現実の世界では、多細胞生物の中の1個の細胞は、外部に存在しない。

遺伝子の塩基配列が分かれば、その人間のことは総て分かる、と言われたのは、塩基配列がまだ未解明であった時期のことであるが、あの予想が全く当たらなかったのは、当然のことであり、部分から、全体は分からないのである。それは、細胞でも、神経でも、筋肉でも、脳でも、総て、同様に考えることが出来る。生物は細胞で生きているのではなく、脳だけで考えて

いるのではない。細胞や脳が機能するのは、全体としての生物が生きている限りのことであり、部分、部分で、生きているのではない。それ故、どれ程、遺伝子を調べても、細胞を調べても、脳神経を調べても、生きている人間を理解することは、ほとんど不可能である(26)。

単細胞生物、例えば、ゾウリムシを考えると、一匹のゾウリムシの小核、大核、食胞などの構造は分かっており、構造としての部品を組み立てても、一匹のゾウリムシにはならない。一つの細胞として生きているゾウリムシの状態を、現在までのところ、我々は、何も知らないからである。しかし、ゾウリムシは、全体としての一つの細胞が生きているのであり、部分が生きているのではない。部分をどれ程、調べ上げて、生きているゾウリムシのことは、これまで、何も分かっていない。それは、全体としてのゾウリムシを見落とした結果である。死んだゾウリムシを分解するのではなく、生きたゾウリムシをそのまま全体として理解し、その構造を知ること、これが、生物を理解するための、最初に乗り越えなければならない問題である。現在のところ、我々には、この生物が「生きる」ことの内容に関する知識は、ほとんど何もない、と考えられる。ゾウリムシが生きていることが分からないまま、人間が生きている状態を理解することは、非常に困難であり、恐らく、不可能であろう。部分としての部品だけでは、生きることは出来ないからである(27)。

1.6 法則

この唯一性と全体性から、存在するものについて、我々は一体、何をどのように理解することが出来るのか。

数の概念を用いて、対象を取り出そうとすることは、実は、対象の大まかな概観を取り出すことに過ぎない。数に依って現実を表現すると、その時点で既に、現実の一部のみを切り取り、現実から離れて行く。数の概念に依って、取り出されたものは、その他、取り出すことが出来なかった取りこぼしの山を築くのである。デジタルのCDの音楽であれば、高音域が限定されており、どれほど高規格にしようが、全く同じことである。それに対して、アナログのレコードであれば、自然音を録音し、人間が音として聞き取れる周波数(20Hz~20kHz)以外の音域も含まれるとしても、振動としてアナログ的に録音した時点で既に、現実の音からは遠ざかっている、という点においては、デジタルと同様なのである。このように、数の概念を用いて、現実を理解する、ということは、如何なる手段を用いたとしても、現実の切り取りなのである。どこまで精密に迫っても、現実の対象自体とはならず、結局は、それらしい類似品を幾つも製作することになる。

カントの物自体(Ding an sich)と現象(Phänomen, Phänomenon)の区別(KdrV)は、これと同じことを語っているように思われるが、しかし、カントの場合、物自体を想定し、カントにとってアプリアリ(a priori)という概念には何の疑いもなく、もちろん、数式も法則

も疑うこともなく、全く異なる次元にいることは明白である(28)。カントにとって、数式や法則は全く正しいものであった(29)。実験を重ね数値化する、これこそが自然科学の客観性を保証する、とルネサンス以降、考えられて来たのであるが、その客観性自体が、実は、かなり怪しいものであったと言えるのである。

当然のことながら、自然の現象を法則的に捉えて来た、従来の自然科学の膨大な知識もまた、現実の現象から、遥かに遊離したものに過ぎない。自然の現象を、数に依って法則化すると、自然には全く存在しない状態を作り出し、そこから自然の現象をのぞき見る、ということ、恐らくは、重々承知の上で、続けているのである。自然の現象は、前述したように、これに先立つ法則はなく、常に法則とは無関係に生じ、法則が作られた後には、その法則には全く従わずに、その都度の現象は生じる。これが、現実と我々が作り上げる法則との関係である。「例外のない法則はない」という表現は、表現自体は問題ないが(30)、実は総ての現象が「例外」であることの言い訳である。

例えば、中学校の数学で、二次関数を学ぶと、「放物線」という表現が出て来る。そこで、実際に、消しゴムを上方へ投げて、それが落ちるまでの軌跡を確認する、としよう。この軌跡が放物線だ、と説明するのは楽しいが、落ちていて考えてみると、消しゴムの形は様々であるし、窓から風が入って来て、軽い消しゴムを動かすかも知れず、これで本当に二次曲線を描いているのだろうか、と生徒が疑問に思うことは、不思議ではない。しかし、ノートには、しっかり、 x と y の二次関数の式が書かれている。 $y=ax^2+b$ である。上向きに投げたのであるから、 a はマイナスだ、とかの説明を聞く。そもそも、 a がプラスの「放物線」は、あり得ないが、教室でそれを言っても無視されるであろう。ところが、何度投げて、どれほど丁寧に投げたとしても、そのような式の通りに軌跡を描く消しゴムは、まず、ない。どこかでずれる。途中でくるくる回ったりする。もちろん、回転する式も作れば良いが、作った式と、実際の回転する消しゴムとの関係は、何をして、どこまで行っても、同様である。式は、現実を表し得ない。更に、毎度の消しゴム投げは、その都度、唯一のものであり、決して、同一の軌跡をたどらない。毎回、異なる「放物線」である。

このことは、教室での消しゴムにとどまらず、地球上での現象、更に、全宇宙での現象に妥当する。地球上での物理「法則」が宇宙全体で妥当するかどうかは、全く不明であるが、宇宙全体が唯一であること、更に、宇宙自体が全体的であること、これこそ根拠もなく、しかし、最も現実に近い考え方であろう。根拠はない、とはいえ、恐らく、この考え方は、この地球上ではもちろん、何らの基準も概念もない宇宙空間でも、妥当する、と考えられる。

2 時 間

唯一性と全体性の観点からすると、では、時間と空間をどのように理解すればよいのか、という問題が当然ながら生じる。これもまた、簡単に扱うことも出来ないことは認めながら、我々の考察の一端を示すために、簡略に論じることとする⁽³¹⁾。

まず、時間について。

時間を直線的に扱うことの困難さは、指摘した通りである。唯一性の観点からも、その都度の時間を確定することは、不可能である。つまり、過去、現在、未来という区分すら、極めて人間的な概念である、ということである。人間以外の植物や動物（一般的な意味での植物と動物）が、時間を知らず、更に、自分が生まれたことも、自分が生きていることも、死ぬであろうことも知ることがないのは、そのためである。人間だけが、そのような時間の概念を持っている⁽³²⁾。その時間の概念を組みためるために、これまで、実に様々な空想の「時間」が作り出されて来た。

現在、宇宙が誕生して138億年になる、と、現時点で言われているが⁽³³⁾、1年、1日、1秒という時間の単位が、宇宙に存在するのではないことは、自明である。時間の単位も、長さや重さの単位と同様で、1メートルや1キログラムが恣意的に決定されているに過ぎないことと全く同様に、1秒という単位が決定されているに過ぎない。セシウム原子時計、つまり原子周波数標準器の精度は、誤差1万～10万年に1秒程度とされているが⁽³⁴⁾、これも残念であるが、誤差も正確さも、実は、何の意味も持たない。1秒という絶対的な単位は、何処にもない。それ故、誤差も正確さも最初から、決定出来ないのである。人間が、どれだけの時間経過を1秒とするか、というだけのことである。

それ故、1日の時間は、太陽が昇って明るくなり、南中し、太陽が沈んで暗くなるまでが、例えば、畑仕事の時間であり、その時間は、季節に依って、毎日、変化するのである。1年のサイクルで言えば、春になって気温が上がれば種まきの時期であるし、暑い夏に作物が成長し、秋には収穫が出来、寒くなる冬には雪に閉ざされ、畑仕事は出来ず、家の中での作業を行う、ということになる。これも、日照時間と気温の変化に従う生活であるが、極めて規則正しい、毎年、同じように行う、農作業である。ここには、原子時計の正確さは必要ではなく、うるう年もうるう秒も全く関係がない。地球上で起きている「時間」の変化に従って人間は生きており、この「変化」は、それを捉えるための単位には依存しない。総ての単位は、存在の後から、人間に依って作られたものに過ぎず、宇宙の存在するもの総ては、そのような恣意的な単位に、その存在の根拠を負う必要がない。繰り返し述べているように、人間が出現する前には、1メートルも1秒もなかったのである。

もちろん、数の概念の場合と同様、測定のための単なる恣意的な単位とは無関係に、「客観

的な」時間がある、と考えるのは、もっともなことである。しかし、それもまた、直線的な時間の推移を前提とし、唯一の存在するものを、同一のものの変化、つまり時間の推移として誤解した結果に過ぎない。従来の時間論は、大抵の場合、その枠内での考察である(35)。総ての存在するものは唯一的である、というのは、否定し得ない「事実」であるが、従来の常識的な感覚からすると、恐らく、受け入れ難いものであろう。しかし、人間だけは、誰もが唯一の一人の人間として存在する。このことは、恐らく「事実」として受け入れられるのではないか。それと同様のことを、我々は繰り返し述べているだけなのである。

時間に関しても、同様のことが言える。存在するものに関して確認すれば、存在するものは、「客観的」でもなく、「主観的」でもなく、唯一の全体的なものとして存在し、これと同様に、時間もまた、「客観的」でもなく、「主観的」でもなく、唯一の全体的なものとして「経過」する。この経過は、常に全体的であり、人間が把握しようとしているような「流れ」ではない。それ故、恣意的な基準を決定し、どのように計測しても、時間を理解することが困難なのである。

では、どのような時間が「過ぎて」行ったのか。恐らくそれは、その都度の唯一性を特徴としながら、全体としての塊りの大きな「時間」であろうと考えられる。時間は、過去、現在、未来という具合に「流れて」いるのではない。この点においても、繰り返して確認しておくが、我々は、存在するものと時間とを区別する必要がないのである。それ故、存在するものと同様に、分割しては、何のことも全く分からず、理解出来なくなるのである。時間もまた、唯一の全体的なものとして、この宇宙全体を覆い尽くす。それが138億年であるかどうかは、不明である。そもそも、この138億「年」という時間の概念に意味があるかどうか、それこそが問題だからである。それ故、宇宙の始まりと終わりについて、我々が何も知る方策もないのは、当然のことであり、始まりと終わりという概念自体もまた、我々人間の概念であり(36)、宇宙全体として、そのような概念が適用可能であるかどうかは、全く不明なのである。不明であることを明確にすることこそ、現時点での我々の最良の方策であろう。

直線的でもなく、円環的でもなく、我々が全く把握出来ない唯一で全体的な時間こそが、地球を含めた全宇宙を覆い尽くしている。我々は、その中で、無理無策で、もがいているに過ぎない。一つの細胞に、全身のことを理解せよ、というのは、無理がある。従来の宇宙論は、ビッグバン理論であろうが、定常宇宙論であろうが、結局のところ、この地球上での時間の概念から出発し、部分から、見えない全体像を空想しているに過ぎない(37)。

それ故、どの宇宙論にも、何らの根拠はあり得ず、あたかも、正しいであろう、という想定の下で、話を作り上げているに過ぎない。つまり、我々の想像と同類なのである。そもそも、物理「法則」を考える時点で、既に現実から遊離している。その点からしても、我々よりも問題がある。その上、更に問題であるのは、数字を用いると、「客観的」であるという大きな錯覚に陥ったまま空想を続ける、ということである。唯一の現象をどれ程、観察して類似品を並

べても、類似品は本物ではなく、その程度で「本物」を理解していると誤解しているに過ぎない。先に、録音された音について述べた通りである。観察の確かさとは、この程度も含めてのことである。どれ程、巨額の費用をかけて、大規模な実験を行っても、実際には、現実を観察することにはなり得ない。たとえ現実に観察されたことが実際の実験性である、としても、次に生じる「現実」は、既に全くの別ものである。実験は、類似品の展示会である(38)。

これも繰り返しておくが、現実の現象には、同一の「反復」というものはあり得ない。非常に類似の現象が、新たに生じているだけなのである。つまり、客観的の意味も考えず、数字の意味も考えず、「科学」的である、という根本的な過ちの上に、我々の知識が構築されて来たのである。この根拠のない客観性に、従来の知識は成立している。この点を明確にすることが、我々が、これまで、述べて来た「知識の解放」(Befreiung des Wissens)なのである。新たな次元の知識は、この確認から出発しなければ、従来と何ら変わりがないことになる。それ故、我々の作業は、出発点の確認でしかない。

これが、今のところ、我々がせいぜい、想像出来そうな時間ではないか。そして、宇宙の全体像が我々には全く不明であるのと同様に、結局のところは、我々に、時間の全体像を把握する能力もなく、その可能性もほとんどない、とも考えられる。このような状態を不可知論と一般的に呼んでいるが、それは、全能の神を前提とした話であり、我々が考えているのは、そのような空想の上の空想ではない。

全くの蛇足ながら付け加えておくと、このような考察について、「客観的な」事実を示せ、とか、根拠を示せ、という意見があるとすれば(当然、あるであろうが)、それこそ、我々の考察の根本的な部分を理解していない、と指摘しておく。無根拠性(Grundlosigkeit)に基づくような主張は、従来、あり得なかったためである。そのような反論は、神話や怪獣の話の楽しさを見落とし、神々の性格を詳細に調べ、怪獣の大きさと強さを比較する意味を誤解することと同様である。

3 空間

では、空間については、どのように考えることが出来るか(39)。

空間も、時間と同様に、唯一性と全体性の観点から考えれば、従来のものとは、全く別のものになる。

空間は、或るものと或るものとの間の3次元的広がりであるが、これもまた、部分を切り取り、全体を見失うことになる。例えば、空間認識において、前後上下左右の感覚は、基本的なものであるが、吹雪の中でのホワイトアウト(体験者からの聞き取り)や、洞窟の水中のブラックアウト(水中カメラマンの話)では、前後左右上下共に、分からなくなるという。ホワ

イトアウトの体験例では、しゃがんで手で地面を触れてみて初めて、それが下側であることが分かる、というのである。地球上でも、このような実際の状況があるが、実は、地球の上に立っている我々自身もまた、どちらを向いているか、決定されている訳ではない。そのことに気が付いていないだけである。宇宙船内で宇宙飛行士が「浮かんでいる」状態を、テレビで見ることが出来る。あの宇宙空間と、地上での空間が、宇宙での空間としては同じなのである。

今、手で本を持っているとして、その手を開けば、本は下に落ちる。しかし、地球の反対側にいる人間から見れば、その本は、地面から空に向かって飛び出すはずである。小学生の絵画で、丸い地球に世界中の人々が両手を広げて立っているものがあるが、その場合、丸い地球の表面に、上を向いたり、下を向いたり、様々な方向に立っている人間が描かれていたりする。これは、全く正しい。地球の裏側にいる人間は、自分とは反対方向に向かって立っている。それ故、「落ちる」というのは、自分が立つ位置において、上下を決定した場合での表現である。地球上であっても、北半球が上側にある理由はなく、世界地図も地球儀も（オーストラリアでは反対であろうが）、北極が上側に決められているだけのことで、そのような上下関係が、太陽系、宇宙全体にある訳ではない。

つまり、地球上においても、前後左右上下、総て、何処かに支点がある訳ではなく、宇宙空間に浮かんでる状態と全く同様なのである。ただ、通常は、それを体感していないに過ぎない。それは、地球の自転（赤道上で約1700km/h）や公転（約10万 km/h）の運動の動きを体感していないことと同様である。宇宙全体が膨張しているともなれば、運動は、更に複雑であるが、我々には、全く感じることは出来ない。我々の脚は、不動の地面に真っすぐ立っているからである。足元に転がっている小石は、地面に動かずにそこにある。

宇宙の膨張とまで行かなくとも、少なくとも、毎日、昼夜があり、地球は自転しているであろうし、季節の移り変わりがあり、公転もしているであろう。不動の小石は、ない。しかし、その運動自体は体感することがない。そして、空間において、前後左右上下も、実は、何処にも方向性はないと、日常的には感じることは、まず、ない。それは、地球上で、部分を切り取った空間のみを捉えることから生じる誤解である。

地球を飛び出し、太陽系全体でも、まだ部分である。そのような狭い領域から解放され、更に宇宙全体としての空間から、人間が地球上で限定的に体感している空間を捉え直すことが、従来の空間の把握とは異なる次元に通じる可能性は高いであろう。これは、時間の場合と同様である。時間に、過去、現在、未来という「流れ」がないのと同様に、空間にも、「中心」や「果て」がない。空間には、分割された部分はない。そのような「概念」もまた、人間が作り出したものに過ぎない。そして、時間の全体が我々には不明であるのと同様に、空間の全体もまた、我々には不明のままである。部分から全体を理解することが困難である、という単純な理由は、時間の場合でも空間の場合でも同様であり、それ以前の、存在するものについての考

察から、全く同様に我々は考えることが可能である。

つまり、我々の観点の到達範囲は、恐らく、かなり遠くまで、宇宙全体にまで、あるのではないかと憶測出来るのである。ただし、これまで同様、不明なものを描き出すことは、現時点では不可能である。予測も、予言同様、不可能である。そうでなくとも、人間の考察は常に暫定的な、途上での見解でしかなく、日々、変化しており、言い換えれば、実に無責任なものでもある。しかし、脳のニューロンの研究も魅惑的であることも確かであるが、地面を歩き回る1匹のアリが生命全体を体現し、素粒子論も更に心躍るものであることも確かであるが、地面に転がっている1個の小石が宇宙全体に通じるとすれば、これ程、経済的なことはない。このことを踏まえながら、我々の考察は、相変わらず不安定に「進行中」である。我々の考察もまた、常に無根拠な中間報告でしかあり得ないからである。

注

- 1 神話については、簡略なものでは、上村勝彦『インド神話』、杉勇他訳『エジプト神話集成』、『シュメール神話集成』、高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』、中村友紀夫編『インド神々の事典』、額田厚編『日本の神様大全』、矢島文夫『ギルガメシュ叙事詩』参照。
- 2 Schmidt, Heinrich: Philosophisches Wörterbuch, S. 719. アリストテレス『形而上学』、第1巻第3章、983b.
- 3 Schmidt, Heinrich, Philosophisches Wörterbuch, S. 559.
- 4 Capelle, Wilhelm: Die Vorsokratiker, S. 69.
- 5 「この黒板に書いてあることはウソだ」、ゼノンのパラドクス、矛と盾、ラッセルのパラドクス、等々、矛盾の問題は、検討済みである。カントのアンチノミーもまた、同様である。パラドクスではないが、「雌鶏が先か、卵が先か」も解決済みである。
- 6 そもそも、この「現在」を取り出すことに無理がある。
- 7 拙論『知識の解放 序論』48-49ページ。
- 8 アリストテレス『形而上学』、カント『純粹理性の批判』、Seebohm, Thomas M.: Elementare formalisierte Logik. 参照。
- 9 拙論『知識の解放 序論』50-51ページ。
- 10 日本の仏教についても、扱うべきことは多くあるが、ここで取り上げる余裕がない。更に包括的な現代思想については、Sandvoss, Ernst R.: Philosophie im globalen Zeitalter. 参照。
- 11 後述、1.6 法則、参照。
- 12 小崎雄他編『天使の事典』参照。
- 13 エスキモーに数の概念が欠けていた、という報告は、本田勝一『カナダ=エスキモー』

- 121-128ページ。このような状況は、現在では最早、確認出来ない。岸上伸啓「カナダ・イヌイトとの体験」参照。
- 14 帰納法については、竹内外史『数学基礎論の世界』3-8、46-58ページ。数学の論争については、Glattfelder, James B.: Information - Consciousness - Reality. 参照。
- 15 中世の普遍論争は、全く異なる状況で行われており、我々の考察の対象にはならない。
- 16 後述、1.5 部分、参照。
- 17 拙論「知識の解放 序論」51ページ。
- 18 ヴィトゲンシュタインから、言語哲学への傾向は、この重要な視点を誤解している。
- 19 「知識の解放 序論」は初めは、「唯一性と全体性」の表題であった。Das Ganze は、ヘーゲル『論理の学』参照。我々が全く異なる次元で考察していることは、明らかである。
- 20 Sandkühler, Hans: Europäische Enzyklopädie zu Philosophie und Wissenschaften, Bd. 2, Ganze/Teil, S. 219-231. 参照。
- 21 ハイゼンベルク『部分と全体』Der Teil und das Ganze は、著者の物理学の研究歴を知るためには非常に有益であるが、この書名に当たる論文は、本書にはない。
- 22 例えば、アリストテレス全集『動物誌』、『動物運動論他』7-9 ページ参照。
- 23 科学史、科学技術史の資料も多数あるが、現代については、佐藤靖『科学技術の現代史』参照。
- 24 $\sqrt{2}$ については、拙論「唯一性に関する再考察」6-7 ページ参照。
- 25 漫画や映画では、全身骨格の骸骨が歩く場面があるが、それについて、骨は動かない、という指摘は、野暮である。
- 26 全体としての理解の仕方として、大隅典子『脳の誕生』、正高信男『子供は身体で言語を覚える』参照。更に生物の理解の仕方として、田口善弘『生命はデジタルでできている』参照。
- 27 ここから、人間の「考える力」の全体性の問題となるが、これについては改めて論じることになる。
- 28 デカルトの懐疑から始まり、カントの道徳法則は問題外であり、アプリアリやアポステリアリ、超越的や超越論的、等々、哲学事典に見られる、ほとんどどのような考え方も、我々の検討済みの単なる概念である。Kirchner, Friedrich/Michaëlis, Carl: Wörterbuch der philosophien Begriffe, PhB., Bd. 500, Auroux, Sylvain/Weil, Yvonne: Dictionnaire des auteurs et des thèmes de la philosophie, Mautner, Thomas: The Penguin Dictionary of Philosophy 参照。
- 29 カントとニュートン力学については、松山寿一「ニュートンとカント」参照。
- 30 繰り返しておくが、人間の表現には如何なる限定もない。

- 31 カント、ハイデッガーは常時、参照対象であるが、ウィキペディアでの記述、時間、Zeit、Temps、Time、Темпо、Времяも参考になる。青山拓央『心にとって時間とは何か』、松浦壮『時間とはなんだろう』、山田克哉『時空のからくり』、吉田伸夫『時間はどこから来て、なぜ流れるのか』参照。
- 32 死の概念については拙論「唯一性に関する再考察」2ページ参照。
- 33 インターネットに依る検索を始めとして、数多くの解説書で知ることが出来る。
- 34 国立研究開発法人産業技術総合研究所ホームページより。
- 35 Sandkühler, Hans: Europäische Enzyklopädie zu Philosophie und Wissenschaften, Bd. 4, Zeit, S. 969–985, Mittelstraß, Jürgen: Enzyklopädie Philosophie und Wissenschaftstheorie, Bd. 4, Zeit, S. 827–831. 物理学と哲学との関係については、Weizsäcker, Carl Friedrich von: Zeit und Wissen., Heydenreich, Aura/Mecke, Klaus: Produktionsästhetik und Werkzeuggenese. 参照。
- 36 生命倫理学において、人間が何時、人間として始まり、何時、終わりになるのか、結局のところ、或る理由を作り出し、何らかの線引きをするだけであり、何の決定的な根拠を見い出せないのは、そのせいである。
- 37 宇宙論については、インターネットでの検索はもちろんのこと、我々一般人向けの解説書も、非常に多数ある。
- 38 とは言え、これまでの考察も、特に生物的な点については、長年に渡る日常的な動物の飼育、植物の栽培、微生物の培養、各種の発酵食品の出来具合等々の実験、観察に依るものであり、実験自体を否定する理由は何処にもない。我々の考察は、常に現実的な日常性（Alltäglichkeit. Heidegger, Martin: Sein und Zeit, § 27. 参照）にある。
- 39 ウィキペディアでは、空間、Raum, Espace, Space, Spazio, Пространство。

参考文献

- 青山拓央『心にとって時間とは何か』講談社、2019年
- アリストテレス全集『動物誌上・動物部分論』7（1968年）、『動物誌下』8（1969年）、『動物運動論・動物進行論・動物発生論』9（1969年）島崎三郎訳、岩波書店
- 上村勝彦『インド神話』筑摩書房、2003年
- 大隅典子『脳の誕生』筑摩書房、2017年
- 小崎雄他編『天使の事典』、学習研究社、2005年
- ルドルフ・カルナップ『物理学の哲学的基礎』沢田允茂他訳、岩波書店、1968年（Philosophical Foundations of Physics, 1966.）
- 岸上伸啓「カナダ・イヌイットとの体験」平成15年度 国立民族学博物館公開講演会「国際

協力の現場から 人類学者の私的実践」2003年12月19日

<https://www.minpaku.ac.jp/sites/default/files/research/activity/organization/staff/kishigami/pdf/031219.pdf>

佐藤靖『科学技術の現代史』中央公論新社、2019年

杉勇他訳『エジプト神話集成』筑摩書房、2016年

杉勇他訳『シュメール神話集成』筑摩書房、2015年

高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店、1960年

田口善弘『生命はデジタルでできている』講談社、2020年

竹内外史『数学基礎論の世界』日本評論社、1972年

中村友紀夫編『インド神々の事典』学習研究社、2008年

額田厚編『日本の神様大全』廣済堂出版、2016年

林隆也「知識の解放 序論」、朝日大学教職課程センター研究報告書 第20号、2018年、45－52ページ。

林隆也「唯一性に関する再考察」、朝日大学一般教育紀要 No44、2019年、1－10ページ。

本田勝一『カナダ＝エスキモー』朝日新聞社、1981年

正高信男『子どもはことばをからだで覚える』中央公論新社、2001年

松浦壮『時間とはなんだろう』講談社、2017年

松山寿一「ニュートンとカント」立命館大学経済学部

http://ritsumeikeizai.koj.jp/koj_pdfs/43508.pdf

矢島文夫『ギルガメシュ叙事詩』筑摩書房、1998年

山田克哉『時空のからくり』講談社、2017年

吉田伸夫『時間はどこから来て、なぜ流れるのか』講談社、2020年

Aristoteles: Philosophische Schriften. 1-6 Bd. Hamburg/Meiner, 1995

Auroux, Sylvain/Weil, Yvonne(Hrsg.): Dictionnaire des auteurs et des thèmes de la philosophie. Paris/Hachette, 1991.

Capelle, Wilhelm: Die Vorsokratiker, Stuttgart/Kröner, 1968.

Descartes: Œuvres et Lettres, Gallimard, 1953, 1999

Glattfelder, James B.: Information - Consciousness - Reality, Kindle, 2019.

Hegel, G. W. F.: Wissenschaft der Logik, I (Werke 5), II (Werke 6), Frankfurt a. M./Suhrkamp, 1986.

Heidegger, Martin: Sein und Zeit. Tübingen/Max Niemeyer, 1979

Heisenberg, Werner: Der Teil und das Ganze, München/dtv, 1973, (1969)

- Heydenreich, Aura/Mecke, Klaus(Hrsg.): Produktionsästhetik und Werkgenese, Berlin/De Gruyter, 2015.
- Kirchner, Friedrich/Michaëlis, Carl(begr.): Wörterbuch der philosophien Begriffe, PhB., Bd. 500, Hamburg/Meiner, 1998.
- Mautner, Thomas(Hrsg.): The Penguin Dictionary of Philosophy, London/Penguin Books, 1996.
- Mittelstraß, Jürgen(Hrsg.): Enzyklopädie Philosophie und Wissenschaftstheorie, Bd. 4, Stuttgart/Weimar/J. B. Metzler, 1996.
- Sandkühler, Hans(Hrsg.): Europäische Enzyklopädie zu Philosophie und Wissenschaften, Bd. 2, Bd. 4, Hamburg/Meiner, 1990
- Sandvoss, Ernst R.: Philosophie im globalen Zeitalter, Darmstadt/Wiss. Buchges., 1994.
- Schmidt, Heinrich: Philosophisches Wörterbuch, 22. Aufl., Stuttgart/Kröner 1991.
- Schischkoff, Georgi(Hrsg.): Philosophisches Wörterbuch, Stuttgart/Kröner, 1991
- Seebohm, Thomas M.: Elementare formalisierte Logik, Freiburg/München/K. Alber, 1991.
- Weizsäcker, Carl Friedrich von: Zeit und Wissen, München/dtv, 1995, (1992)
- Wittgenstein, Ludwig: Tractatus logico-philosophicus, Philosophische Untersuchungen, (Werkausgabe Bd., I), Frankfurt a. M./Suhrkamp, 1984.